

氏 名	伊藤 夏実	
学 位 の 種 類	博 士（美 術）	
学 位 記 番 号	甲 第 33 号	
学 位 授 与 日	令和 5 年 3 月 12 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
論 文 題 目	絵画制作を通した、瞬間的接触の連続化を巡って	
審 査 委 員	主査 女子美術大学大学院教授	大 森 悟
	副査 女子美術大学大学院教授	福 士 朋 子
	副査 女子美術大学大学院教授	三 谷 理 華

内 容 の 要 旨

本論執筆のきっかけとして、親しかった友人の訃報を受けた際に筆者が経験をした、物体はいかなる時も他の存在と関係を結びながら存在しており、「私」という個人の持つ思考や感情ですら出来事の引き金になりえるという、個人と世界との相互干渉への気づきがある。これは、筆者にとって世界と出会った瞬間であった。この瞬間を起点として、2020 年から日々日記を記すとともに、ドローイングと油彩作品を制作しており、この論文ではこれらのテキスト並びに作品を巡る考察を試みる。

本論文の記述は、思考の変遷を観察するために、テーマを付した日記のテキストを日付け順に並べ、それらを作品と関連させる形で行う。絵画およびドローイングと、それに付随する形で日々日記として「私」という一人称で記してきたテキストを並置する形式を採用することで、友人が亡くなったことをトリガーとして生み出された思考を確かな記憶として保存することを目論む。筆者の生活や読書を通した体験と制作とを往還しながら得られたインスピレーションと、そこから生まれる絵画について、筆者の感想や日常的な所感を交えながら論じていく。個人の日常を含む断片を繋げる行為は、一人の人間の行動や記憶を現在進行形で持続させる試みではないかと考えるからである。

このように進める本論が目的とするのは、忘却に晒されがちな瞬間的な認識の鉢合わせや、拮抗しながら蓄積され続ける記憶、そして、周囲の物体に作用する可視化されにくい力関係を定着させるための絵画を制作するきっかけとなった着想について明らかにすることである。制

作に至るのまでの発想の過程や制作中の思考の要素を記録としてまとめることで、筆者自身の制作中の思考内容について理解し、これからの制作へと生かすことがこの論文の目指すところである。世界と出会ったと感じた瞬間のような、作品を取り巻くようにして存在している今この瞬間にも消えてゆこうとする思考をキャッチすることで、自己認識をし、それらの思考が具体的にどの作品に繋がっているのかを探ることで自己理解を進める。それは、筆者が制作に至るまでの思考のルーツを自らの内側に探るということである。消えゆく思考に対して言語化をすることで、自分の見解を理解し、作品へのさらなる自己認識を推し進める。筆者が作品を制作するに至るまでの着想の過程や制作中の思考内容について探求し、意識化することで、筆者自身の作品が広がりのある展望へと導かれていくことを期待するものである。

このような目論見のもと、本論は、次のような構成により進んでいく。

第一章では、異なる物同士や記憶が接触することで起こる物事や認識の変容について扱う。友人が亡くなったことをきっかけとして描いた2021年制作の筆者の油彩作品である《The world touches me, and I also touch the world.》では、いくつもの形態を重ね合わせて描くことで抽象的なイメージを形作っているが、友人の誕生花であるカタバミの花や飛び立つイメージのある蝶のような具体的な形態の描線が描画の最後に加えられることで、物語性のあるイメージ同士が接触し合い新たな意味を生み出している。個人の持つ記憶もまた、他者の体験や認識と干渉し合いながら姿を変えらるるということを意識化することで、常に生まれては消える筆者自身の認識について明らかにする。

第二章においては、なぜ動物の中で人間だけが描くという能力を持ち、イメージを獲得し得たのかについて探求する。フランス文学者の吉田裕による論文「イメージの経験：パタイユ『先史時代の絵画 ラスコー 芸術の誕生』」の中で多く引用されている、フランスの哲学者ジョルジュ・パタイユの言葉からインスピレーションを受けて制作をした筆者のドローイングについて述べる。パタイユは描く行為がいかんして生まれたかについて、ラ・ボーム＝ラトロンヌ等の多くの洞窟で発見された粘土の上に指により窪みとしてつけられた線や、絵具に塗れた指によって岩の上に残された線などの行為の痕跡、岩の表面に偶然できた線といったもの、それら自体が解釈の対象となり、描くことの出発点の役を果たすことがあり得たと述べている。そこから受けた筆者の解釈をもとに、自らが絵画を制作する過程に着目し、画材が作り出す重層的空間から生み出されるゆらぎから絵を発見していく過程について探索する。身体感覚や知覚の領域を介在して繰り出される画材の物質感とイメージの関係について、筆者の解釈を述べる。

第三章は、外界を意識的に眺めることを通して、今ここにいる自分自身というものを思い出すことについて記述する。「中観派」の祖とされるナーガルジュナの『中論』の中でも重要な観念である「縁起（因縁生起）」から得た、世界は相互依存的に成り立っており何物も単体では

存在し得ないという思想から着想を得た、筆者の油彩作品について述べる。2021年に制作をした油彩作品である《幾重》は、絵画空間を眺めるうちに、さらに新たな関係性を幾重にも見出し定着させている。全てが関係し合い依存しあうことで成り立つという思想は、今現在のこの場所とこの瞬間に存在する、あらゆる現象や現実を受容していくような姿勢であることを確認してゆく。

第四章は、記憶やイメージの生成や消失の過程について意識化することを目的とする。医学者の岩田誠は美術評論家の中原佑介との対談の中で、先史時代の人たちが描いていた絵がいかにもリアルに見えるのは、我々の記憶に対してリアルだからであると述べている。描かれた動物は実物の動物からは遠く離れた質感や色、比率であるにも拘らず、記憶として脳内に蓄えられた動物のイメージを呼び起こすことができるのだという。筆者自身が、何をリアリティとして外界を見ているのかについて探求をする。もの派の理論を牽引した美術家として知られる李禹煥は、対談の中で、「目というのは、目の前にあるものを素直に見るということは実はほとんどなくて、実際は見ようとしない限りはほとんど物を見ていない。それをその気にさせるひとつが絵であると思う」と見解を述べている。見るための装置としての絵が、筆者にとって実際に何を見ることを可能にしているのかを2枚のドローイングを通して探る。

第五章では、記憶やイメージが変容する過程について述べる。ブックデザイナーであるピーター・メンデルサンドは、本を読む際に何が起きているのかについてを述べた著書で、読書中に得られた登場人物や舞台となる場所について、読み進めていくうちにそれらに関するイメージを絶えず修正しながら想像しているのだとしている。与えられた情報をもとに頭の中で生成されたイメージは、自分自身の体験から形作られているはずであり、想像した内容によって自分の持っている記憶を自覚し思い出すことができるという、読書中に得られた筆者自身のインスピレーションを綴ることで、絵画中に繰り返し現れる形態のルーツ、またはイメージの基盤を探る。

このように本論では、筆者が世界と出会ったと感じた瞬間を起点として記してきた日記というテキストをもとに、作品を制作するに至るまでの着想の過程や制作中の思考内容について探求している。タイトルにある「瞬間的接触の連続化」とは、作品制作を行う際に生じる絵の具同士の関係性のことであり、人や物が現在という時空間の中で関係をさまざまに変化させてゆくことを指しているものでもある。世界と関わり続けることなくして人は生きてゆくことはできないため、筆者にとって生きることと、作品制作を行うことは不可分なものとして存在しているのだと考察を通して捉えることができた。今回は、絵を描くことを通した世界を確かめる過程について検証することを目的としたため、筆者が以前制作を行ってきたような構造物を用いたインスタレーションなどメディアを変えた場合の制作においてはどのような認識の変化が生じるのかについて考察してみることは今後の課題としたい。また、筆者にとっての世界

と接触し続けるための手段としての作品制作は、自分以外の他者にとってはそれがどのような行為に代わり日常の円環を形作っているのかという点にも関心を寄せてみたいと考える。本論を踏まえて今後も引き続き、個人の意識が世界に開かれてゆく瞬間について意識化をすることで、作品制作においてもさらなる発展を目指してゆきたい。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本博士論文は、提出者本人が書き記した日記の記述を最初の手がかりとして考察を開始し、そこに日記の記述と同時期に制作した絵画、ドローイングを絡めていくことで、自らの作品制作のインスピレーション源や感覚のまま留まり言語化されていなかった制作意図を明確にし、自作の持つ意味を意識化することで、自らの美術作家としての方向性を見出すことを第一の目的としていた。そして、この作業、考察を通じて提出者の思考、感覚は読者と共有されていくのだが、これにより読者は、提出者の世界観をとものにたどり、人間にとって「描く」とは如何なる意味を持ちうるのかそれぞれに思考をめぐらすことになる。この「描く」ことに対する思考を促し、創作と人間存在に関し思いをめぐらすことへと読者を誘うことが、期せずしてであったかもしれないが、本博士論文の第二の目的であり、また一つの読み物としての大きな魅力ともなっていた。

上記の目的、あるいは魅力を有する本博士論文において特筆すべき点としては、提出者の日記を枕とし、論文として必要な論理的構成の保持には努めつつも、随想調の文体により自作の持つ豊かなニュアンスも十分に伝える仕上がりとなっていることであろう。無味乾燥な作品説明となることなく、また、自らの感覚を綴ることにはまり込むことで読者には理解が困難な文章となることもなく、絶妙なバランスにより日記という自らのテキストと絵画、ドローイング作品、ひいては日々の膨大な読書から引き出された思考を絡め合わせ、美術作家である提出者の独自の世界観の表現に一定の成功をみせている。本博士論文のこうした構成や文体には、ある種のオリジナリティを見出しうるとともに、美術作家による文章表現の一つの可能性を示すものとして意義を認めることができよう。

また、本博士論文においては、提出者は自らの記憶と外界の認知のあり方を確認しつつ、脳内で移ろいゆくそれらの要素を折々に固定し、最終的には自らの「生」を確かめるために自身の手で描くことを必要としているとの理解をもたらした。このことは、デジタル技術が大きな発達を見せる現代社会においてなお、手作業が持つ意義について大きく示唆するものであり、古来よりの営みである人間の手による創作の有する現代的意味の再認識をも促すものである。さらにこのことは、美術作家としての提出者の活動の意味の理解を促し、それを高

めることにも繋がり、美術家が自作を語る文章の果たすべき役割を十二分に果たしている点でも優れたものを認めることができる。

このように本博士論文は、提出者の美術家としての思考や活動の意味、そしてそれが現代社会において持ちうる意義について、独創性を有する構成と文体で論じ、個々の読者にも同じ視点からの再考を促す興味深い論考となっていた。その上であえて欲を言えば、本博士論文の執筆を通じて何が得られ、それが創作者としての今後にどのように生きると考えるのか、提出者の考えや展望についての記述が今少し加わっていることが望まれると思われる。加えて、自身の制作と思考の過程を開示することが、読者にとってどのような意味を持つと提出者は考えているのか、今少し明確な記述や説明があればより説得力のある論文になり得たかとも思われる。

しかしながら、繰り返しとはなるが、本博士論文は美術作家による論考の一つの可能性を示唆する点で大きな意味と独創性を示すものであり、博士後期課程修了の水準を満たすと十分に認められるものである。